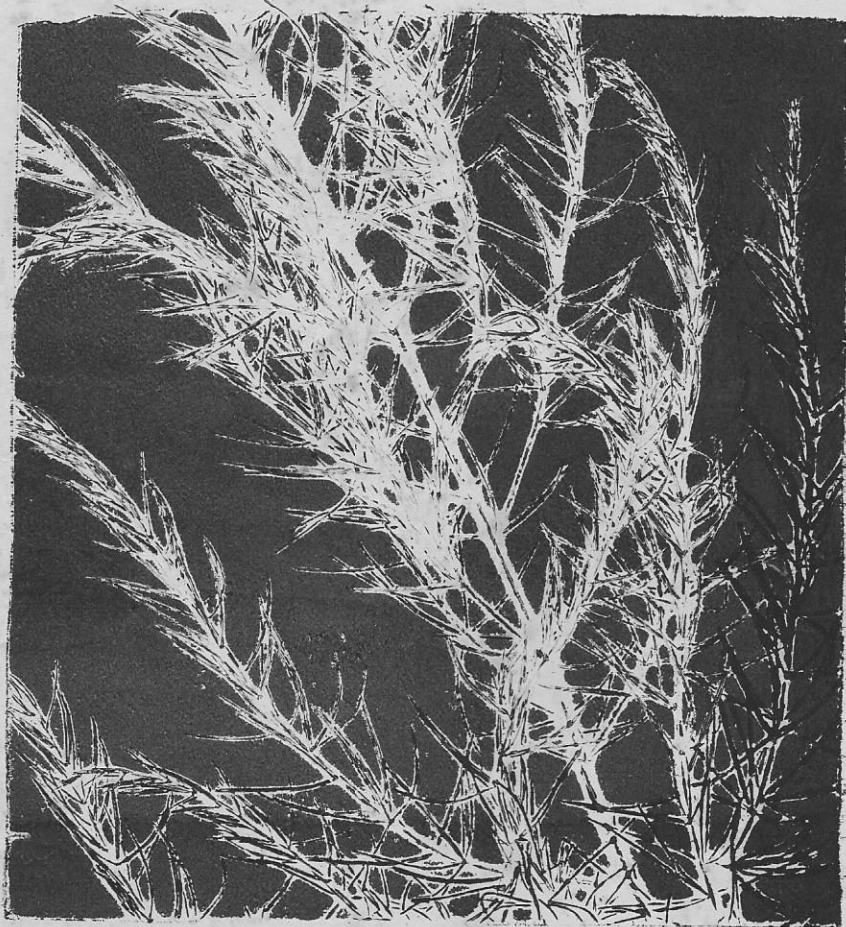




LEONTODO



1952
AUGUSTO

N-ro 2

ENHAVO

1. ANTAŬPAROLO YAMAGA ISAMU----1
2. HAMLETO 高橋 達治 ----2
3. Malluma Subombro
de Akaciarbo から 花園 凡太郎 -----5
4. Eĥo ŬAKISAKA KEIJI---14
5. Sindbad de Maristo K. M. -----16
6. 風変りな専門委員の話 早川 昇 -----18
7. Esperanton en la Olimpiadon! 山本 昭=郎 -----

あとがき

Wakôdo yo, Zinsei ni Yume o !

Belan Songon ! Gejunuloj !

Yamaga - Isamu

Watasitati wa mahiru ni yume o mite iru orokamono ka ?
Ningen wa tōi mukasi kara yume o mite kita. Sōsite
sono yume wa kazime wa kūsō(空想) to site hito ni
waraware nagara mo, yagate me no mae ni arawareta
mono ga sukunaku nai. Sora o tobu yume o hazime
kazoe kirenai hodo takusan aru dewa nai ka !

Ningen no ayumi wa iwaba yume o otte sore o hitotu
hitotu zibun no mono ni site yuku hitosuzi no miti
de aru to iu koto mo dekiyō.

Esperanto wa kibō no hito, sore wa mō kūsō no
yume kara nukedeta konō yo no mono da. Watasitati no
hitotu hitotu no tikara ga kitto ōkina mi o musubu hi
no tōku wa nai.

95-sai de nakunarareta Tanakadate-Aikitu Hakase no
kotoba to site : " 100 nen demo 200 nen demo matō.
Mosi ima hito ga yaranai kara to itte dare mo yaru
mono ga nakattara, itumade tatte mo dekinai. "

" Ne estu tiel senpacienca ! Ni atenda 100 jarojn
aŭ eĉ 200 jarojn. Ankoraŭ tiam ne efektiviĝus la
afero, se neniu nun laborus. Tial mi laboras, mia
amiko. "

Yume wa utokusiku wakawakasii -- sore wa wakôdo no
hukuramu mune da. Yume o idaite itumade mo wakaku,
tosi o tottemo kokoro wa wakôdo no yō ni !
Zinsei wa kōsite tanosii -- Soroban no sekai kara,
arasoī no yononaka kara, wakôdo yo, zinsei ni yume o !
Yagate ituka hi no me o miru isizue to natte ---

HAMLETO (de ZAMENHOF)

高橋達治

山賀先生から Zamenhof 訳の Hamleto を拜借した。malfacila なので英和対訳の Hamlet を参考にしながら近頃時々とり出してよんでいる。すると Hamlet なる drama からうげとられる感想以外に、その traduko に対する二三の感想を得たので、潜越ながら書いてみたくなった。—— ともかく Zamenhof という人は精力家である。語学的天才という点を抜きにして、その精力家であるという点だけをあげても彼は世界に名を為すだけのことはしただろう。エスペラントを構成するというだけでも大きな一生の仕事でありうる。それなのに此に加うるに彼の多大な verkaĵo は——!

英語で書かれた Hamlet を言葉の調子の全然ちがうエスペラントに traduki することは全く容易なわざではない。或夕方、私にだつて Hamlet 翻訳くらいは何とかなるだろうと思つて原文と辞書にとつ組んでみた。後の方を、まだ Zamenhof の訳で読んでいない才三幕辺を開いてその有名な一節にとりかかつてみる。

Hamlet :

To be, or not to be : that is the question :
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take armes against a sea of troubles,
And by opposing end them? To die ; to sleep ;

(邦訳)

生きながらえてあろうかな、それともあるまいか、
それこそ思案の致しどこ
あれ狂う運命の放つ
石と矢を受けたまへ心に耐えるのと、

それとも波とよせくる苦難にむかい

戦ってその根を絶やすのと

果していづれが貴い途かな

北は即ち眠り

(私が訳にとりかかる)

Ĉu esti aŭ ne esti : tio estas en demando

Kiu estas pli nobla en mia koro suferi

Ŝtonĵetojn kaj sagojn de furioza fatalo

Aŭ sin armi kontraŭ maro de malfeliĉegoj

Kaj

ここまで来てから、よみ返してみても、どうもごっごつした文で気がかかる。そこで、韻をふんでみると、

— / — / — ; / — / — — /

/ — / — — / — — / — / — — / —

— / — / — — / — — /

— / — / — / — — / — /

全然なっていない。此は困った。原文にあまりに頼り過ぎては原文のリズムによる意味が到底あらわれてこないのだ。あれこれやってみたが、そうすると行がむやみに多くなってみたり、内容の意味が違って来たりする。仕方なく私は Zamenhof 訳の Akto III を開いた。

(Zamenhof 訳)

Ĉu esti aŭ ne esti, — tiel staras

Nun la demando : ĉu pli noble estas

Elporti ĉiujn batojn, ĉiujn sagojn

De la kolera sorto, aŭ sin armi

Kontraŭ la tuta maro da mizeroj

Kaj per la kontraŭstaro ilin fini ?

For morti — dormi, kaj nenio plu !

すばらしいものである。これは完全な Hamleto だ。内容もリズムに乗って生き生きと表現されている。言葉の使い方で私が無理に sling を Stonĵeto などと訳したのをあざやかに bato で表現して居り、ĉiuj を入れて意味をもつとはつきりとしている。that is the question whether ----- も、私みたいに tio estas en demando kiu ----- などとせず tiel staras nun la demando ĉu ----- としているが、このときの “nun staras” がいかに生き生きと（原文よりも！）していることか。

Traduko ということとは Traduki される言葉、する言葉をよく理解している事と同時に senco が豊かであれば不可能である。今の Hamleto の前に Polonio が Ofelio にむかって、

“----- Vi legu en la libro
ke li ne miru la solecon vian
-----”

というところがあるが、原文では

“----- Read on this book !
That show of such an exercise may colour
Your loneliness -----”

であり、原文の長い表現を唯 “miri” で全く簡明に表現している点など内容を理解する senco が自由に立ち働いているのである。

エスペラントでこのような古典を traduki することは容易なわけではない。Hamleto の有名なセリふに “Malforto ! via nomo estas virino !” (Zamenhof 訳) というのがあるが此について朝里の榎先生から聞いたことがある。或日先生がガラスを買ってその帰途ガラスを割ってしまい再びガラス店にとってかえした時、“Frailty, thy name is woman !” とやられたそうだが、あとで Frailty は決して、“かばせい” とか、“弱い” とかいう意味でなくて、このガラスみたいに “もろい” “脆弱” だということ

とをいうのだと私に教えて下さった。所が Zamenhof の malforto はそのまゝ訳せばただ“弱い”になる。“脆弱”と訳せないこともないが讀者がそうはっきりととつてはくれまい。それでは rompiĝema とでも訳すか、それでは何だか表現が“ロコツ”になるようでおかしい。こんなところにエスペラントの vorto のニューアンスの不足があるようだ。そしてここにエスペラント訳のむづかしさがあるのだと思う。

私達にとってザメンホフは彼方に崇高を思わせる巨獄だ。私達がそれに一步でも近付けば近付く程大きく見えてくる。巨獄なのだ。けれども私達はそれにもつともつと近付いてゆかねばならない。或いは一生の間にはできるところまではのぼつてゆかねばならないだろう。——と、そんな気持が Hamleto をよんでいる時に起きて来た。

(27. 7. 10)

Malluma Subombro de Akaciarbo が—(=)

二葉亭四迷について 花園凡太郎

今頃二葉亭四迷のことなど“担ぎ出すと、大へんカビくさい昔話のように思はれるかも知れないが、明治文学があらためて再検討を加えられている今、二葉亭について語ることは強ち無駄ではあるまい。

二葉亭は majstraĵo 『浮雲』により、あるいはツルゲーネフの『あひびき』『めぐりあひ』等の名訳によって、搖籃期の明治文壇に多大の影響を与えたばかりで無く、Esperantisto としても、わが国で初めて、1906年(明治39年)に、『世界語』(Esperanto)の memlernolibro を出版したり、D-ro Zamenhof の EKZERCARO de la lingvo internacia „ESPERANTO”を初て出版している点から見ても、われわれ Esperantistoj にとっては、忘れてならぬ pioniroj の一人である。

二葉亭四迷は、本名を長谷川辰之助といい、元治元年(1864)2月

28日に、江戸市ヶ谷合羽坂の尾州分郡で生れた。

明治元年(1868) 彰義隊が上野で官軍に大敗を喫した後に、諸藩引払いの時、長谷川一家は今の名古屋に移った。5才の二葉亭は母に伴はれて行った。二葉亭はそこで漢字塾に入って漢文を学び、傍ら伯父から素読を習った。また藩校で英仏語の中、フランス語を林正十郎、フランス人ムウリエーから教はった。翌年の秋(10月) 東京に帰った。明治8年(1875) 12才の年に、島根県庁の役人として赴任する父に従って松江に行き、漢学塾で漢文を修めた。また松江変則中学校に入学して普通学を修めた。

明治11年(1878) 15才の春に帰京して、陸軍士官学校を志願したが、*miopoco* のために不合格となった。二葉亭はこりずに翌年も翌々年も陸軍士官学校の入学試験を受けたが、*intencia miopoco* のためにまたもや不合格となった。(大正のはじめ頃までは陸軍士官学校では *miopulo* を絶対に採らなかつた。)

未来の陸軍大将の夢が破れた。18才の少年二葉亭は、今度は未来の外交官を志して旧外国語学校(官立外国語学校の前身)の露語科に入学した。ロシアの圧迫によってわが国が千島樺太交換の條約を締結したことに刺戟されたためであつた。ところが当時の語学校のロシア語科は、ロシアの *liceo* と同じ制度で教学、物理・化学・修辭学、ロシア文学史などを全部ロシア語で教授していた。教科書が不足なため教授グレーが毎時ロシア文学の作品を朗読して聞かせては、その作中の人物の性格批評を各生徒にロシア文で書かせて提出させた。このグレーは *parolarto* の名人で調子も面白く、節も面白かつた。眞に妙を極めたもので、誰でも聞惚れない者は無いほどだつた。……レルモントフ、ツルゲーネフ、ゴーゴリ、カラムジン、カラゴゾフなどで、トルストイの『戦争と平和』なども誦んだ。

二葉亭は初めから小説家になつたりするつもりはなく、ただ一生徒としてなに気なしにロシア文学に接したことが、かえつて戲作的な文学伝統に染められぬ白紙の心で、その性格をよく理解させることができたの

である。
高の前身
たもの
ちようと
者、作家
て令名を
を貼つた
もなくで
遙が二葉
は年齒わ
美妙齊と
辛二篇に
は後代の
見る力は
客觀性に
『風流14
される』
わかる。
二葉亭
上の深い
あひ』に
りも推賞
一節から
自分は
とはして
どうやら
小心な鴨
く飛び過
エツて、

である。二葉亭は諸学校の露語科が学制改革のため商業学校（旧東京高
高の前身）に合併されたので、一時商業学校の露語科5年に学籍を転じ
たものの、どうにも辛棒がし切れなくなって、断然退学してしまった。
ちょうどその頃、坪内逍遙〔シエークスピア全集の完訳を残した英文学
者、作家〕は処女作『書生氣質』を堂々と文学士春逝舎臈の筆名をもつ
て令名を博した。二葉亭は『小説神髓』の疑問のところどころに不審紙
を貼ったのを携えて、突然春逝舎臈の門を叩いたのは学校を退学して間
もなくであった。こうして二葉亭は逍遙と手を握り、『浮雲』第一篇は逍
遙が二葉亭の原稿に加筆して二人の共著として出版された。時に二葉亭
は年齒わずかに24才であった。今行はれている言文一致の開祖は山田
美妙斉と言はれているが、二葉亭はそれとは別の言文一致体を『浮雲』
第一篇に於て創造している。二葉亭の『浮雲』が同時代の青年、あるい
は後代の文学者たちにどんな新鮮な影響を与えたかは「長谷川氏の物
を見る方は早く発達したらしい。『浮雲』はこれを證している。彼^あ様いふ
客観性に富んだ作品が明治二十年頃——紅葉氏の『色織梅』や露伴氏の
『風流伝』より二三年前に——早く世に云々されたといふことには驚か
される」と島崎藤村は二葉亭追悼文集の中に書いていることによつても
わかる。

二葉亭が当時の青年——眞剣に文学に志した青年に『浮雲』よりも上
の深い影響を与えたツルゲーネフの名訳『あひびき』および『めぐり
あひ』には最初の訳文とあとから訂正した訳文とがある。前者を後者よ
りも推賞する人に中野重治氏がある。試みに同じ文章を『あひびき』の
一節から抜いて legantoj の参考にしよう。

自分はたちどまつた————心細くなった。眼に遮る物象はサツパリ
とはしてぬれど、おもしろ気もおかし気もなく、さびれはてたうちにも、
どうやら間近になった冬のすさまじさが見透かされるやうに思はれて。
小心な鶉が重さうに羽ばたきをして、烈しく風を切りながら、頭上を高
く飛び過ぎたが、フト首を回らして、横目で自分をにらめて、急に飛び
止って、声をちぎるやうに啼きわたりながら、林の向ふへかくれてしま

った。鳩が幾羽ともなく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んで来たが、
フト柱を建てたやうに舞ひ昇って、さてパッと一斉に野面に散った——
ア、秋だ！誰だか禿山の向ふを通ると見えて、から車の音が虚空に響き
わたった、……—— 初訳『あひびき』の一節

自分は心細くなつて^{たうどま}停歩^{たうどま}した……—— 眼中の風物は流石に^{おび}飛然^{おび}とはし
ているが、味気なく寂れ果てて、何處かに間近くなった冬の凄まじい悒
が見えるやうである。小心な鳥が重さうに^{はばたき}羽^{はばたき}を^{はばたき}して、烈しく風を截つ
て、頭の上を高く飛んで行きながら首を換向けて、自分の姿を見ると其
儘、急に飛上ってちぎったやうな声で啼き啼き、林の向へ隠れて了ふと、
鳩が幾羽ともなく群を成して、勢込むで穀倉の方から飛んで来て、ふと
棒の挿れたやうに舞昇って、^{うそくさ}蒼皇^{うそくさ}と野面に降りた—— 秋に違ひない！
誰やら禿山の向を通ると見えて、空車の音が高々響渡る……——

—— 改訳『あひびき』の一節

二葉亭はこの『あひびき』時代を追懐して『あの時分はツルゲーネフ
を崇拜して、句々皆神聖視してぬだから一字一句どころか言語の排列ま
でも原文に違へまいと、一語二私の苦辛をした。あんな馬鹿骨折は最う
出来ない。今ならどしどし訳してやる』と笑ったことがあるそうだ。併
し、後年関節炎を病みながら、一日に三四十枚も訳して、全然 poluri
しないツルゲーネフの長編『浮草』(ルーゲン)でも、可なり原文に忠実
であったそうだ。

二葉亭がいかにロシア語に堪能であつたかは次の話でも解るだろう。

『浮雲』の原稿を書いて、日本文の字句に困るとロシア文で書いてそ
れをあとから邦訳したために『浮雲』の文章は大部分欧文くさい箇所が
あるそうだ。(私は『浮雲』を旧中学の五年生の時読んだだけで、今手
許にあるが未だ通読していない)

二葉亭のロシア文は学生時代からグレー教授が感嘆したという位で、
後年ダンチエンコが来朝して能見物に案内した時、ダ氏に示すために、
当日の能の筋書を前の晩のうちにロシア訳したというほど腕達者であつた。

ついでに、
語、専門の
米人イース
清国人(中
エスベラ
治35年(1
ハルビンに
ら断言はで
二葉亭は
常一郎と机
間は、彼の
く衣食の安
進化論を研
道の曙光を
その思想の
頃であつた
を翻訳した
官報局を
となつたり
であつた。
の短篇をと
外国語学
9月で、口
大いに満足
したので、
Instru
頭に徹底す
層多く諸生
学は、先

ついでに、二葉亭の語学力について書くならば、少年時代のフランス語、専門のロシア語、英語(これは23オの年に英国宣教師バンダーと米人イーストレキに就いて学んだのである)、40オの年には北京で清国人(中国人)杉某からシナ語を学んだ。

エスペラントを学んだのは浦塩のあるロシア人からだというから、明治35年(1902)の5月に外国語学校ロシア語科の主任教授を辞取してハルビンに向う時ではなかつたらうか。(今私の手許には資料が無いから断言はできないが。)

二葉亭は、26オの1889年に内閣官報局雇員となつて、旧師古川常一郎と机を並べて翻訳の仕事をしたが、それから辞任するまでの数年間は、彼の全生涯を通じて最も平穩な時代であつた。二葉亭はこの間漸く衣食の安住を得たので、猛烈に勉強した。ダーウィン、スペンサーの進化論を研究したがそれに憚らないでコントの哲学に走つて、初めて一道の曙光を認めるに至つた。それからモーザレーの著述の研究によって、その思想の根柢を固くした。ロムブローゾー派の著書を研究したのもこの頃であつた。明治29年(1896)にはツルゲーネフの『片恋』(アーク)を翻訳した。

官報局を辞取してから暫く放浪していたが、その間に海軍の編修書記となつたり、陸軍大学の囑託教師となつたりしたが、どれも一時の腰掛であつた。ツルゲーネフの『ルージン』を始めゴーゴリ、ガルシンなどの短篇をどしどし訳して名雑誌に寄稿したのはこの時代であつた。

外国語学校のロシア語科の教授になつたのは、明治32年(1899)の9月で、ロシア語科の主任教授恩師古川の推挙によるもので、二葉亭は大いに満足もしたし喜んだ。間もなく古川氏が病のために主任教授を辞したので、二葉亭は其跡を襲つて主任教授となつた。

Instpuistoとしての二葉亭は、極めて親切丁寧であつて諸生徒の頭に徹底するまで反覆教授して少しも倦まなかつた。が、それよりも一層多く諸生徒を心服せしめたものは彼の鼓吹した学風であつた。凡そ語学は、先づその民族の研究から始めなければならぬ必要と、日露の地

理的関係から生ずるロシア語学者の特殊の用途というような事を語学教授の傍ら常に怠らず力説して、尋常語学の学習以上にロシア語学者として特殊の気風を作るのに少からず腐心した。二葉亭が語学校に在任したのは僅かに三年であつたが、其人格は遠くロシア語科の生徒を薫化して、先進市川及び古川と連んで『露語の三川』と仰がれるほどまでに悦服された。日露戦争に参加して抜群の功績を挙げたロシア語の通訳官の多くは、二葉亭の薫陶を受けたものであつた。

だが二葉亭は長く語学校の椅子に安んずることはできなかつた。一時鎮まっていた実業熱が再び頭をもたげて来た。

それはシベリアに滞留していた旧同窓の佐波が浦塩から歸朝して屢々二葉亭を訪問したり、新たにサガレン(樺太)から浦塩に渡航した一人の友人からも度々手紙が来て浦塩の消息が頻りに報告されたためである。

浦塩の徳永商店が、ハルビンに支店を設置するのでそこに来て欲しいとのことで、その徳永にも二葉亭は東京で会見したので、語学校長高楠順次郎と衝突して心中不平に堪えられなかつた際なので、断然外国語学校を辞職して東京を出発した。然るにハルビンに着いてみると猛烈にコレラが流行して毎日850人の新患を生じて、しかも防疫設備が不備のため患者の大部分は斃れてしまうという騒ぎであつたから市民は恐慌して高売は殆んど閉止してしまつた。それに加えて、其頃から露国の官憲は外国人、特に日本人に対しては警戒が嚴重を極めて、動もすれば軍事探偵の嫌疑で逮捕した。こんな有様で徳永商店は手も足も出せなく圧迫された。

そこで二葉亭はハルビンを中心とした北滿一帯東蒙古に到る商工業、物産、貨物の集散、交通運輸の状況等をつがさに調査した後に、東清鉄道沿線の南滿各地を視察しながら大連、旅順から營口を経て北京へ行つた。北京の政情を視察する傍ら本場でシナ語を学ぶためであつた。そこでは幸ひ旧語学校の同窓川島浪速が警務学堂の監督として声望隆々として日の出の勢いであつたので、一夕の飲談に忽ち肝胆相照らして、ついに川島の配下に学堂の提調に就任した。だが其処でも些細な事から遂に

辞取して
明治3
学者内藤
露及び滿
しかし二
が乏しか
滿の心を
のうちに
きた。
を伸ばす
を最后ま
弓削田
明治39
た。続い
『其面
は争はれ
いたのだ
朝日の編
には滿蒙
籍が大阪
抗議を持
たは談話
明治4
チエンコ
つた。二
いに宏博
葉亭の不
ダンチ
した。そ

辞取して帰朝した。明治36年(1903)の7月であつた。

明治37年(1904)の春、日露戦争が始まると間もなく3月に支那学者内藤湖南の紹介で大阪朝日新聞社に入社して東京出張員として、東露及び満州に関する調査と、露国新聞の最近情報の翻訳とを担任した。しかし二葉亭の折角苦心して書いた翻訳の原稿は新聞記事としては価値が乏しかったため紙屑籠に投じられることが多かつた。彼はまた不平不満の心を起して幾度も辞取を申し出たが主筆の池部三山が慰撫した。そのうちに日露戦争は終結して、読者はもうロシアや満州の記事に飽き飽きした。そこで、三山や有力な朝日の社員は、二葉亭を文学の方面に力を伸ばすように百方勸説したが、その度に二葉亭は苦い顔をした。それを最後までかかって説得したのは弓削田秋江であつた。

弓削田の倦まない説得に動かされて二葉亭が止むなく筆を執つたのは明治39年(1906)の秋から朝日新聞に連載された『其面影』であつた。続いて翌年10月には『平凡』を連載した。

『其面影』と『平凡』とは、言はば『浮雲』の惰力的作品であることは争はれなかつた。二葉亭の頭からは根本藝術的興味は去ってしまつていたので、がそれにもかゝらず、世人は盛んに此小説を歓迎し、東京朝日の編輯局では主筆から給仕にいたるまでみんな挙つて感嘆した。前には満蒙に関する二葉亭の論策研究を虐待した大朝の編輯局が二葉亭の籍が大阪朝日に在るのを楯にとつて、当然大阪朝日にも掲載すべきだと抗議を持ち出した。各文学雑誌は争つて、文学及び思想に関する論文または談話を請うて載せ、二葉亭の文人としての名声は益々輝いた。

明治41年(1908)の春ロシアからダンチエンコ翁が来朝した。ダンチエンコ翁は文士としては二流であつたが、新聞記者としては一流であつた。二葉亭は朝日新聞社の代表して毎日諸方を案内した。そして、互いに宏博な知見を交換したので、意気銷沈、窒息しそうになっていた二葉亭の不平不満を軟げることになつたらしい。

ダンチエンコは、深く二葉亭に信服して、頻りに露都への末遊を希望した。そして主筆池部三山や社長村山龍平に向つて露都通信員の派遣を

勧めた。その最適任者として二葉亭の人格と識見とを推賞したので、村山社長の心もついに動いて、その提案を入れることになった。こうして二葉亭の露都ペテルスブルグ（今のレニングラード）行は決まった。

二葉亭の顔からは *melankolian viza gesprimon* が何処かえ消し飛んでしまい、毎日露都行の準備で多忙を極めた。6月12日に新橋駅を発して渡露の途に上った。13日に大阪につき、14日には敦賀にまで出掛けて、ロシアから帰った後藤新平を迎え、米原まで同車して種々懇談したが、この時の談話の内容は秘密にされたので永久に迷である。

6月17日に神戸から大連丸で大連に向い、22日に大連着。27日に *Harbino* 着。7月12日 *Moskvo* 着。14日 ついに *Sankta Petrogrado* (今の *Stalingrado*) に到着した。

8、9月頃からまたも *nervastineco* に罹り、年末には快癒した。

明治42年(1909)2月14日にウラヂミール大公の葬儀を見送ろうとして道端に立っていると、降りしきる雪に打たれたためか、クラクラ目まいがして、雪の上に倒れた。同伴の日本人数名驚いて駆け寄り、彼を介抱して下宿に送り届けた。二葉亭は、それから寝ついた切り、枕を上げることはできなくなって遂に、ロシア人の病院に入院した。医師の診断の結果、病名は *pluminflamo* と *ftizo* であった。ロシア人の医師は暖かい *Odeso distrikto* に転地するか、日本へ帰国するように勧めたが、二葉亭は頑に拒んだ。しかし病勢は益々悪化するばかりで、日本人達の熱心な勧告もあったので、二葉亭もついに兜を脱いで帰国することになった。シベリア鉄道によるか、船にするかが大きな問題であったが、船で帰国することになって、病気が幾分か落付いたのを見計らって、大阪商船の支配人末永氏が付添うて、4月5日に在留日本人数名に見送られて、淋しくも *Sankta Petrogrado* の駅を出発した。Berlino を迂回して Londono に着き、そこから N.Y.K. の汽船加茂丸に投乗したのが4月9日であった。末永支配人は船まで見送って、事務長に二葉亭のことを依頼した。

加茂丸に乗船する時は担架で運ばれるほど重かった二葉亭の病状も、

出帆して
朝日新聞
る二葉亭
葉亭には
れで手厚く
とが出来る
で、愈々
亭の病気が
sana にお
船は無心に
亭の病に惟
荘嚴な落日
つて、静ま
れて、二葉
5月15
の有志と相
哩離れたパ
留僧釋梅仙
二葉亭の
基地の信照
て、心から
は一人も見
下生が誠意
には、池田
満と躍って

出帆してから次第に恢復して行つた。末永依頼人からの特別依頼と、大朝日新聞社の社員であり、有名な文学者であり、ロシア語の大家でもある二葉亭四迷の名は、事務長はじめ船員の間にも知られていたもので、二葉亭には Sipa kuracisto の外に、特に一名の kelnero が附けられ、手厚く看護された。この分なら、あるいは無事に日本に帰国することが出来るのではないかと期待されたが、船が Porto-Saido に着いて、愈々 antertropika regiono に入ると、気候の激変から、二葉亭の病氣は急に華まり、Kolomboに着いた時はすでに morte malsana におち入つた。5月10日に船は Hinda Oceano に入つた。船は無心にひたすら東え東えと紺碧の青海原の上を走りつゞける。二葉亭の病に憔悴した顔には、死の影が刻々に深まってきた。午後5時15分、荘嚴な落日が西の空に傾きはじめ、海も空も、黄金の色に赤い色に染まつて、静まりかえる時、船長、事務長はじめ多くの船客の悲しみに囲まれて、二葉亭は眠るがごとく、その48年の生涯を閉じた。

5月15日 加茂丸は Singaporo に着いた。近藤事務長は、土地の有志と相談のうえ、事務長以下十数人が二葉亭の遺骸を、埠頭から3哩離れたパセパンシヤンの丘の上に、假の野辺の送りたして、日本の在留僧釋梅仙を請じて懇ろに誦經供養した後で茶毘に附した。

二葉亭の遺骨は5月30日に新橋駅に着いた。葬儀は6月3日に染井基地の信照庵で営まれた。会葬者は数百人——みな故人を尊敬し感嘆して、心から哀悼痛惜する——知己友人門下生のみで、金ピカの高位高官は一人も見られなかつた。初夏の夕映があかあかと照り輝やく中に、門下生が誠意をこめて捧げた百日紅ツゲノハナの樹の下に建てられた白木の墓標の上には、池田三山が雄渾の筆を揮つた『二葉亭四迷の墓』の七字が墨痕淋漓と躍っていた。

(fino)

(31. Julio)

Hodiaŭ, Joĉjo ankaŭ volis viziti kun hundeto Po-ĉi monteton, kiu troviĝas malantaŭen de la domo.

" Paĉjo, mi volas iri al la monteto, ĉu ne ? "

" Jes bone, Joĉjo. Kaj ankaŭ mi devas viziti najbaron. Do, vi manĝu sola tagmanĝon pretigitan kaj ankaŭ por via Po-ĉi. "

" Jes paĉjo, do mi iru. "

Joĉjo vigle ekkuris al la monteto. Po-ĉi ankaŭ kuris ĝoje post lin, bojinte boj, boj.

Joĉjo nun havas sep jarojn. Lia patrino jam mortis, kiam li estas sesa. Kaj li nun vivas soleca kun sia patro. Li estas sola filo. Nur la hundeto Po-ĉi estas lia amiko.

Ion antaŭe, kiam la patrino mortas, ŝi alvokis lin kaj diris kun larmoj en siaj okuloj ;

" Mi devas foriri al malproksima mondo. Do Joĉjo, vi zorgu milde vian domon kun via paĉjo dum mia foresto. "

La malgranda Joĉjo estas momente malĝojiga, sed li ankaŭ pensis ke la panjo vere foriros ien por sia afero kaj li diris al la panjo frapante manon kun mano :

" Jes panjo, mi certe gardos milde mian domon, kaj vi devas alporti al mi multe da bonaĵo, kiam vi revenos. "

Kaj post du tagoj, la patrino mortis. Pof helpi ilin per siaj manoj, vilaĝanoj alvenis al lia domo. Subite en la domo vigliĝis. Tio ankaŭ tute ĝojigis lin kaj li ĉirkaŭkuris ĝoje kun Po-ĉi tien kaj reen. Sed tiu ĝojo ne daŭras tiel longe, ĉar la funebra ceremonio jam finiĝis kaj vilaĝanoj foriris unu post unu. Nun, en la domo oni trovas nur du homoj ; li kaj lia patro. Jen la malĝojeco forte atakis lin kaj tio ĝanĝiĝis je severa amo al la patrino en lia koro.

" Paĉjo, post kiom da dormoj, la panjo revenos ĉe mi ? "

Li konfuzigis la patron, tiel dirinte multfoje.

" Laŭ mia opinio, Joĉjo, vi dormu dek aŭ dudek tagojn. Kaj tiam, via panjo certe revenos. Do, vi devas atendi ŝian revenon milde kun Po-ĉi. "

Sed la patrino ankoraŭ ne revenas post lia dek kaj dudek dormoj. Jam li dormis dum pli ol duon jaroj, sed ankoraŭ ne ----

Kiam Joĉjo pensas pri sia patrino, la forta soleco ĉiam okupas lin. Kaj tiam, li ankaŭ kutime ekkuras al la monteto kun la hundeto Po-ĉi, dirinte ke " Jen Po-ĉi, iru al la monteto ", ĉar oni vidas tie la tombon de lia patrino.

Iam la patro akompanis lin ĉi tien kaj diris :
" Jen vidu, Joĉjo. Tra tiu tombejo via panjo feriris al malproksima mondo. Sed baldaŭ la panjo revenos. "

Tiu monteto sin kovris per densa herbo, kaj en printempo tie floras diversaj floroj. Ĉirkaŭ la monteto staras vicé altaj larkoj kaj sur la arboj pepadas bele paseroj kaj aliaj birdetoj.

Joĉjo nun venis ĉi tien kun Po-ĉi kaj li kriis kun granda voĉo en sia tuta forto.

" P-a-n-j-o-, mi petas, vi revenu frue, e-- kaj ankaŭ Po-ĉi atendas vin --- "

Kaj tiam, tiel kiel respondas al la krio, malgranda sono aleĥas de iea malproksima, malproksima loko. Joĉjo fiksiĝas siajn orelojn al la eĥo, ĉar ŝajnas al li ke la eĥo estas tia milda voĉo de la panjo.

" Ho, estas panjo ! "

Joĉjo denove volis aŭdi la eĥon, kiu nun malfortiĝis pli kaj pli, kaj li kriis kun granda voĉo du kaj tri foje :

" P-a-n-j-o- ! Vi re venu frue, e --
N e n i u n d o n a c o n m i d e z i r a s --
F - r - u - e - r e v e n u , u --- "

Fine li kun plorvoĉo ----, kaj li ankaŭ fiksiĝas siajn orelojn al la eĥo, kiu sonas de malproksima loko kaj, kiu similas al la voĉo de la panjo. Por longa tempo, kaj li fiksiĝas ----.

(Fino)

Sindbad de Maristo

Tradukita de K. M.

En Bagdad, antaŭ lingaj, lengaj jaroj, vivis malriĉa viro nomata Sindbad de portisto. Iun tagon li haltigis sian piediradon sur trankvila strato apud ankoraŭ ne vidata pempa domo kaj ripozis iom da tempo. Pro tre profunda laceco li laŭte ekplendis, ĉar li laboras severe ĉiutage. Sed mastro de la domo pasigis sian tempon manĝante, drinkante kaj ludante kun amikoj. Subite la paĝio stariĝis antaŭ la malriĉulo kaj diris: "Mia mastro deziras paroli kun vi." Kompatinda portisto tre timis ke la mastro jam aŭdis lian plend-voĉon tamen stimulantante bravecon li ekstaris kaj eniris en la domo kun la paĝio. Tie li vidis grandan halon kun multe da riĉuloj kaj alt-rangaj nobeloj kaj en la fronto sidis unu maljunulo -- la dommastro.

Lau lia prezento oni bonvenigis la malriĉan portiston kaj sidigis lin antaŭ la maljunulo. Kaj la mastro ordonis alporti manĝaĵojn kaj drinkaĵojn al siaj paĝioj. Kiam Sindbad finis manĝadon kaj drinkadon la maljuna riĉulo diris: "Vi eble povus envii min, ĉar ŝajnas al vi ke mi estas riĉa kaj feliĉa kaj ne bezonas labori kiel vi. Nu, aŭskultu, mi rakentas al vi pri mia pasinta vivo. Mi ankaŭ estas nomata Sindbad kaj oni nomas min kiel Sindbad de maristo. Mia patro estis miliardulo kiu havis grandegan loĝejon kaj multe da sklavoĵoj. Kiam li mortis, li postlasis al mi liajn tutajn havaĵojn sed mi estis tre malsaga kaj ne zorgis konservi mian monon. Tial en iu tago mi trovis ke mia mono estis preskaŭ konsumita kaj mi devis labori por pano.

Mi ne konis kiel mi vivos kaj post pensado, mi decidis aliĝi al grupo de komercistoj kiuj baldaŭ eknavigos al tre malproksimaj landoj por komerco. Ni navigis kun favora vento kaj preterpasis multajn insulojn. Fine ni atingis malgrandan, malaltan kaj verdan insulon kiu ŝajnis al ni kiel herbejo kaj ni surteriĝis sur ĝi.

Tie ni havis kelkajn sinbordojn. Sur la sinbordoj revenu al la lando. Sub la maro akvo. Dan lignan vazteriĝis al estis tre

La reĝo rakonton de lando. Mi vivon voja tiuj vojaĝmaro naĝis teruraspek

En iu tago simen unu komprenis naskiĝarbo Do, mi veni propra domo

Tie ni havis tre plezuran tempon, kelkaj kuiris manĝaĵojn, kelkaj sin banis en la maro kaj aliaj ludis ĉirkaŭ marbordo. Subite la ŝipestro alvokis nin, ke ĉiuj tuj revenu al la ŝipo, ĉar la lando kiu ŝajnis al insulo estis ja unu giganta viv-kreaĵo. Ĝi ekstremit kaj subigis sin sub la maro forlasante baraktantajn maristojn en la akvo. Dank' al neatendita feliĉo, mi povis preni grandegan lignan vazon kaj en ĝi mi drivis ĝis kiam la vazo alteriĝis al iu insulo. La indiĝenoj kiuj renkontis min tie estis tre bonkoraj kaj kondukis min al ilia reĝo.

La reĝo tre bonvenigis min kaj aŭskultis tre interese rakonton de mia aventuro kaj ordonis min loĝi en lia lando. Mi tuj volonte decidis loĝi tie kaj havis gajan vivon vojaĝante al malgrandaj najbaraj insuloj. Al mi tiuj vojaĝetoj estis multe plezura. Kompreneble en la maro naĝis sennumero da fiŝoj de ĉiuspecaj malbelaj kaj teruraspektaĵaj kaj ili multe kaŭzis timon en mia koro.

En iu tago kiam mi staris sur marbordo, venis proksimen unu ŝipo simila al rememorata. Baldaŭ mi komprenis ke ĝi estas la ŝipo kiu eknavigis de mia naskiĝejo. La ŝipestro ankoraŭ havis miajn vendaĵojn. Do, mi vendis ĉiujn kaj revenis tuj rapide al mia propra domo de Bagdad. "

風変りな専門委員の話 早川 昇

万国エスペラント協会の「年刊」(1952年版)を見ると、随分沢山の専門種別に専門委員 (Fakdelegitoj) の定められてあることが判るが、今試みに其の中から、風変りな御専門の委員を拾って見ることにする。予レッタントであるという事は、我々仲間の倫理観念からは芳しくない事とされるが、然し、此の点えの自戒を忘れないならば、そういうお方々とのたまさかの文通も、世路の苦澁を忘れしめる葡萄液ではあろう。

1. 手蹟性格判断学 (Grafoloĝio) 委員

D-ro H. Bitterling. Schillerstr. 66, Göttingen,
Niedersachsen, Germanujo.

2. 奇術 (Magio) 委員

R. G. Robbins. Botany Dept, University College
of West Indies, Mona, Kingston, St. Andrew,
Jamaiko.

S. W. Ahlm. Pontonjägatan 33, Stockholm, Svedujo.

3. 玄秘秘密教 (Okultismo) 委員

R. Damiani. Via Carducci 12, Trieste, Italujo.

4. 降神術 (Spiritismo) 委員

A. K. Afonso Costa, Banco do Brasil, Belo Horizonte, Brazilo.

A. Castor de Lima, Rua Pres. Passos 566, Manaus,
Amazonas, Brazilo.

P. de O. Ludka, Caixa Postal 161, Niterói,

Rio de Janeiro, Brazilo.

H. Pitta, Caixa Postal 945, Salvador, Bahia, Brazilo.

J. Gomes Braga, Praga do Rosario 91, Ubá, Minas Gerais, Brazilo.

Mas s
J. dos
5. 西洋片
J. Har

V. Fai
Richa
R. Pfü
Sergi
E. Mis
T. Lin
O. E. Z

6. 接神術
F-ino
先づ先
しく風変

少し前の
ンキで
な内容の

国際的能
うもので
ルミンキ
る。当該
を克服する
競技の形
国内国外の

Mas sif Isaac. P.K. 350, Giza, Cairo, Egiptujo.

J. dos Reis Pires. Rua Patrocínio 113-1-D, Lisboa, Estremadura,
Portugalujo.

5. 西洋将棋遊び (Ŝakludo) 委員

J. Hartley, 21 Birch Grove, Levenshulme, Manchester, 19,
Lancashire, Britujo.

V. Faigl. Náměsti č. 6, Zlonice, Bohemio, Ĉeĥoslovakujo.

Richard Bohnert. Adenstedt über Alfeld, Niedersachsen, Germanujo.

R. Pfütze. Mittelschule. Büsum, Schleswig-Holstein, Germanujo.

Sergiusz Czerniaków. Lubicz apud Torun, Polujo.

E. Misiurewicz. ul. Gorlicka 16 m. 3. Wroclawlo, Polujo.

T. Lindberg. Prässebo, Västergötland, Svedujo.

O. E. Zimmermann. Arbenzstrasse 12, Zürich 8, Svislando.

6. 接神術 (Teozofio) 委員

Fino E. Vasconcellos. Caixa Postal 5.888, São Paulo, Brazilo.

先づ先づ此の辺を以て、此の稿は終らせで置くが、次号からは、今少
しく風変りでない御専門の委員を、書かせて頂く事にしようと思う。

Esperanton en la Olimpiadon!

山本 昭=郎

少し前のことであるが、エスペランチストによるオリンピックサービスがヘルシンギで Sano Karlo の prezido の下に結成された。そしてこのサービスは次の様な内容の通知を以つて方々のエスペランチストの団体へ自己紹介した……

国際的催おしとしてのオリンピック競技は、言語に於ける種々の困難をいつも伴うもので、準備委員達に対して看過し得ぬ悩みをもたらしている。そのことは、ヘルシンギの才 15 回オリンピックの準備にあたつても、それと確認されるものである。当該委員会 (respondeca komitato) は細心の注意をもって、これらの諸困難を克服するために対策を練っている。

競技の編成委員会で lingva programo が討議された時、エスペランチスト達は国内国外の同志の協力によってエスペラントの適応性を委員会に説明し、納得させ

ることにとめた。

世界各国から観覧に来る15万人の客のうちには相当数のエスペランティストもいるということがもう既に確認されている。だからこそ、この国の中央部のエスペラント協会はこのサービス委員会をつくり後援しているのである。

吾々は、吾々の“サービス”の存在をオリンピック委員会に披露して、吾々の活動に対する是認を求めた。オリンピック委員会はこの種の委員会を正式に代表することを吾々に許してはくれなかつたとはいえ、その *Kaloteko* の中に吾々を登録してくれたのである。そして、正規に公布される報告書によつて、その準備の進行状況を逐一吾々に報告してくれることを約してくれた。実際的なサービスとして既に吾々は、その内容がエスペラントの重要性を強調してある一通のエスペラントの手紙を彼等へ翻訳してやることが出来たのである。

その様な事情であつたから、吾々は、エスペランティストのオリンピックサービスが全く假のものであり、どんな公的の金銭援助もなく、全くの自発的協力によつてその任務を遂行しているということを認めてもらいたいのである。こんな次才で、吾々の活動も極めて制限されているのである。

オリンピック開催中に、吾々は、吾々の *tondo* 外のものに向けられている関心を吾々へ引きつけるためと、訪客中のすべてのエスペランティストを一室に会わせるために集会を二度催すことを予定している。その日時・場所を吾々は吾々の一番うまく出来る方法で、この事に興味をもつてくれる人へ通知するだろう。だが、吾々に通知を要請するに先立ち、返信料を先拂してくれることを吾々はのぞんでいる。競技中吾々はヘルシンキの *Sano*, *A. Ruhanainen* のとこで終日電話を前に当直している。

Propagando それが何か好意ある意図をもつて書かれた手紙であれば、吾々はオリンピック委員会に何らかの良い影響を与えることになるし、従つて吾々の評判も良くなろうというものである。その意味で吾々はあなた達へ手紙をオリンピック委員会に送ることをすすめる。だが、単にエスペラントの使用を忠告するにすぎぬ手紙を送ることは無益であることを強調しておきたい。何故つて、この問題については、オリンピック委員会は既に自己の見解を表明してしまつているのだから。そして又、この種のだしぬけの手紙の洪水は喜ばれることではない。なぜなら、その事はあまりにはつきり“挑戦的攻撃”と受取られるおそれがあるし、良いもくろみなのに、かえつて反対の結果を引きおこさないとも限らない。

宿泊所 吾々のサービスは訪客達への宿泊所を用意する義務をまでもっていない。とても急場の時には、吾々も出来るだけのことはしよう。だが、成功は請合えない。

入場券
で吾々は
取つてお
ら。外国
手される

もう1
にがい経
かかげた
領を全世
LKKの
於ける怖
とを必要

指摘さ
ら摘出し
たとえ

持つたが
らなかつ
アメリカ
ら。アメ

イ語と同
或は“手
ラジルと
を交した
テーマとな

“番号に
その本の中
(選手・役員
本の中から
を伝えられ
れたものを
あつたなら

!(vere
つと簡単な

入場券 外国からの客達のために入場券を取っておいてくれるとの要請が来たので吾々は、そのことは逆も出来ない相談だと注意してやった。何故なら、自国用に取っておいたストックの中から入場券を手に入れる者は若干の国内人だけであるから。外国では券が既に発賣されている。吾々は、各自が入場券を直接に、急いで入手されることを勧告する。



もう 15 年も前のことだが、ベルリンのオリンピック競技の折の言語についての長い経験の後に、吾々が今日こうしている様に吾々はヘロルドに同じ様な要求をかけた。吾々はその時言ったものだ。「エスペラントを学校の科目に！」という綱領を全世界のエスペランチストの集りえ伝えるというワルツヤワ市の万国大会の、LKKの決議は妥当なものだった。だが、ベルリンの第 11 回オリンピック競技に於ける怖るべき言語の混乱を確認したことは、必然的にオニの綱領をうち立てることを必要にした。すなわち「エスペラントをオリンピックに！」である」と。

指摘された「怖るべき言語の混乱」について吾々はその時ドイツの雑誌の数冊から摘出した恰好の実例の残ったものを発表した。

たとえば、オリンピック競技の折にイタリアからの客をベルリンの或一家族が受持ったが、その接待のために特にイタリア語を覚えはじめることさえしなげらなかつた彼等の困惑。だが実際はイタリア人の代りにアメリカ人が来た。彼等はアメリカ人とは絶対に了解し合えなかつた。何故って、彼等は英語しか話さないから。アメリカ人の地方訛がそれを一層ひどくした。彼等にとってはトルコ語やマライ語と同様に理解出来ぬものだった。-----というのが論ぜられた。

或は「手と足で互に了解し合ったということや、オリンピックの女子宿舎でブラジルと日本の女子運動選手が隣合ったが、「唾のごとく黙して、心からお互に微笑を交した」ということや、番号による方法でお互に了解し合ったということなどもテーマとなった。

「番号による相互理解」の為に、各国語で書かれてある本が発行されさせた。その本の中の各語句には番号が付けられてあつた。だから、もし *patroprenantoj* (選手・役員?) のうちの誰かが外国人の誰かへ何かを告げたかつたなら、彼はその本の中から自国語の(言いたい)語句をさがし出し、その番号を求めた。その番号を伝えられた相手の外国人は、自分の本の中から同じ番号の語句の自国語に翻訳されたものをさがした。そんなふうにして彼等は(もしそのための時間と忍耐が充分あつたなら)時間をかけて言葉のない「会話」が出来た。実際、すばらしい着想だ!(*vere genia eltrovo!*)少なくとも、ザメンホフ博士が人類に与えてくれたものと簡単な、もつとすばらしい、もつと完全なお互に了解し合えるもの(Inter-

komprenigilo) を認めようとしなない彼等によつてはそれ以上のものはない。

だが、ヘルシンキでその方法で互に了解し合う事はベルリンの頃や、ずっと最近のロンドンの時よりもっと困難だろう。何故って、沢山の選手や監督達は疑いもなくドイツ語と英語を、或はどちらか一つを学んでいたか、少なくとも片言位は知っていた。ところがフィンランド語は誰も知らないときている。だから、ヘルシンキでも“手と足で”お互に了解し合うだろうし、ここでもまた、沢山の patro + entontoj や patro + pentoninoj が、唾の杯に黙して、お互に微笑し合うだろう。そしてここでも又性慾りもなく、そのみんぱんな使用回数にもかかわらずどうしても充分の意思疎通をはかれぬ不完全な語句を羅列した本による、杜撰きわまる方法を踏襲するだろう。 Ĝis kiam ankoraŭ?

以上の翻訳は Heroldo de Esperanto の4月1日号に掲載してあったものである。もうヘルシンキのオリンピックは終ってしまったが、在ヘルシンキのエスペランティスト達がいかに活躍したか、この後日譚を知りたいものである。もし幸いにその記事を手出未だなら、早速載せるつもりである。私は第2号に一寸した一小文を Esperante で書いてのせるつもりであつたが、いろいろと多忙であつたので書きかけのまま放置してある。間にあわないのでそれは棚あげした。この翻訳は昨日(17日) 仕事から帰つてすぐとりかゝり、深更までかゝつてどうやら文章にした。もちろん意識のところも多く、独善的な訳も或はあつたかも知れない。時間がなくて充分の推敲を加えず、この点遺憾としている。乞諒恕。

(18. Aŭgusto)

gazeto
の杯なち
美しい平
さん。ど
稿があつ
anojにも
たいため、

あとがき 1

あとがきのまえがき

ことわっておくけれど、これは才1号のあとがきなのである。才1号は七月八日に発行したのだが、時間がなくてあの通り杜撰なものとなってしまった。表紙には絵も入れられなかったし、(書くのが楽しみの)編輯後記も原紙に書く時間がなかったのは本当に残念。

才2号に才1号の編輯後記をのせるなんて破天荒なことなのだが、こういうことのゆるされる屈託なさがこの gazeto のいいところ。

私はエスペラントは独り素熱だけれど、エスペラントの勉強を続けることはたのしいことだし、最近はじめたもう一つの趣味、謄写印刷を実地にやってみるためにも、役柄ではないのを承知でこの gazeto の編輯と印刷とを引受けた才。編輯印刷は、実地にやったことは皆無なので、あれもこれもと気ばかりあせて、そのくせいつこうに能率があがらなかったし、刷上りもあまりよくない。この gazeto は私にとって、いわば處女印刷。だんだんといいものにしてゆきたい。寄稿者や読者に満足され喜ばれる称なものにした

のみなさんもどうか協力して下さい。

gazeto に原稿があつまらなくては積荷のない汽船の称なもの。この汽船“Leontodo号”の行先は、美しい平和の国、Esperantujo です。さあ、みなさん、どしどし託送して下さい。才1便には8人の原稿があつまりました。とくに、Novaj Gesamideanoj にも読んでもらい、Grupano となつてもらいたいため、japane で書いてもらいました。

あとがき 2

一雨ごとにすずしくなつてゆく八月中旬、Leontodo 才2号を諸氏に送る。

才1号は表紙の一部に脱字などあつたりして、今思ひ出しても恥づかしいのだが、それでもできばえについて大人達が過分のほめことば(laudo)を借しまなかつたので、気をよくして才2号の充実心がけた。

今月号の圧巻は、何といつても榎坂氏の“Eho”であろう。童話など、この Leontodo には最も適当したものであるから、これからもどしどしこの種のものを書いていただきたい。花園凡太郎氏は才1号の“芥川の読書カ”に引き続き“二葉亭四迷について”を執筆された。この種の人物月旦、凡太郎氏の如き Cionosciulo には打つてつけであると思う。資料蒐集が間に合ったなら、次号(次回)は宮沢賢治について書かれる由。諸者もしも参考になる称な資料があつたなら示唆されたい。どの vetko も充実したいものにするためにお互に協力することは本義のエスペランクスモの具象化といえないだろうか。

1号、2号を通じて、redakto として特にかんじたことは、新かなづかい、舊かなづかいについてである。はつきりいうと、概してちやんぽんに使う人が多い。新かなづかいと去つても、まだ斯界のオーソリティ達の間にむとがくの論議があることだから、とくにどちらを、と限定はしないけれど、混同はなるべく避けていただきたいものである。

El nomejo

DE RU ESPERANTO ASOCIO

DE RU-SI Hanazono-cyo Stgasi 3, 11 bt

aktoro

YAMAMOTO SHOJIRO

Prezo 10 jenoj